

研究 成 果 報 告 書

(いしぐろ かずひと)

石黒 和仁

小千谷市立東山小学校 教頭(前 上越市立大町小学校 教諭)

教科・領域教育専攻 生活・健康系コース 保健体育 平成10年度修了

研究テーマ「かかわりの中で生成する学びに着眼した体育カリキュラム開発に関する実践的研究」

(1) まずは運動体験ありき

今、体育においても他者とのコミュニケーション能力や論理的思考力の育成が求められている。しかしながら、夢中になって運動に取り組む中で他者とのコミュニケーション能力や論理的思考力の育成が行われる。休み時間の子どもたちは夢中になって遊ぶ(運動する)。その過程でコミュニケーションや論理的思考を行い、結果として力を付けている。うまくコミュニケーションや論理的思考ができずもめることも多々あるが、コミュニケーションや論理的思考を目的として遊ぶ(運動する)子どもは皆無である。子どもは遊びたい(運動したい)から遊ぶ(運動する)、楽しいから遊ぶ(運動する)のである。体育においては、まずは運動体験ありき、である。

(2) 動きのおもしろさへの着目

基本的には、「運動の機能的特性(競争, 克服, 達成, 模倣・変身)」を運動の楽しさとして、単元の中核(内容)に構想する。ただし、運動の楽しさには、運動後に得られる勝敗や記録, 出来等結果にかかわるものと、運動中に得られる身体的な感覚(心地よさや心地悪さ)にかかわるものがある。前者の目的合理的・論理的な内容のみならず、かかわりによって運動が成り立つ、運動体験そのものを重視するというスタンスから、後者の感覚的な内容として「動きのおもしろさ」に着目していく。

(3) 動きのおもしろさを仲間と探究する過程に言語活動を取り入れる

子どもが仲間と、どうやって運動をするのか(動きのおもしろさの探究)を考え、選択・決定する話合いの場、仲間と共に運動してどんな感じや気付きをしたのか(動きのおもしろさの体験)を振り返る場(いわゆるワークショップ)を言語活動として位置づける。

(4) 適度な内容、他者との呼応・協働

運動の中で自分の存在を感じることができ、一人一人が意味を見出せるようにする。そのため、子どもにとって、できそう感がもててやってみたらできたという、主体的・積極的に取り組めるような内容、適度なレベルの内容にする。「運動に子どもを合わせるのではなく、子どもに運動を合わせる」という古くて新しい体育における格言のとおりである。

また、他者との呼応や協働がある場を設定する。例えば、他者(複数もしくは全員で)と一緒に動く、他者(複数もしくは全員で)と連なって動くといった、個人スポーツの集団化である。他者とのかかわりのためというより、より動きがおもしろくなる、違った感覚を楽しめる、という視点から取り入れる。

(5) 実践例(いずれも小学校2年生)

- ・「きらきら・ジャンプパーク」(跳の運動遊び)
- ・「きらきら・ぶらぶらぐるぐるランド」(鉄棒を使った運動遊び)
- ・「けってごー! とってごー!: キックベースボール」(ボールけりゲーム)
- ・ * 詳細は上越市立大町小学校校内研究実践レポート参照